GCOE ワーキングペーパー
次世代研究　60

地域社会における親密圏の再編と再創造に関する社会学的研究

朝田 佳尚
（京都大学文学部非常勤講師）
森田 次朗
（京都大学文学部非常勤講師）

2012 年 1 月

京都大学グローバル COE
「親密圏と公共圏の再編成をめざすアジア拠点」
Global COE for Reconstruction of the Intimate and Public Spheres in 21st Century Asia

〒606-8501　京都市左京区吉田本町 京都大学大学院文学研究科
Email: intimacy@socio.kyoto-u.ac.jp　URL: http://www.gcoe-intimacy.jp/

はじめに

近年、日本の農山漁村では「限界集落」という言葉が注目を集めている。生業や冠婚葬祭の衰退、廃校や医療施設の閉鎖など地域社会の存続それ自体が困難となっているのだ。この傾向は都市中心部や郊外においてもある程度共通している。やはり「シャッター商店街」や「ゴーストタウン」という言葉で、地域社会の存続は問題化されている。こうしたなか、地域内部における親密圏のあり方もまた急速に変容していると考えられる。それは従来の地域社会の内部だけではなく、外部との関係という意味でも確認できる変化ではないだろうか。

昨年度までの本研究ユニットは、以上の問題意識をもとに三重県の東紀州地域でフィールドワークを行い、その結果を、社会の再編成の影響と地域住民による生活実践とが交錯する場としての地域社会という像にまとめてきた。具体的には、1）林業組合などの共同組織が衰退しつつあるなか、「地域再生」への取り組みも行われはじめており、同様の動きは農業や学校教育の領域でも確認できること、同時に 2）そうした地域再生への取り組みを「互助」などの概念をもちいて分析する可能性を提示してきた。こうして、現代社会において地域の人々がいかに「共同的」な圏域を能動的に再構築しているかを分析してきた。

本年度は以上のような研究成果を踏まえながら、各自が東紀州地域以外のさまざまなフィールドに赴き、現在の地域社会において既存の「地域」の枠組みをこえた社会的なネットワークがどのように成立しつつあるかを分析することにしたい。

以下では、各章の具体的な議論に入る前に、本報告書の内容の説明をかねて、各プロジェクト・メンバーが実施した調査の概要について言及したい。

朝田は、近年の地域社会における防犯活動の広がりという点に着目し、主に神奈川県で聞き取り調査を行った。調査からは、安全・安心に対する不安感をもとに様々な防犯活動がはじまり、それが住民による独自の防犯カメラ設置にまで至るという過程が明らかになった。また、そうした活動には多様な関係者の助力があることから、防犯という課題をもとに、住民が従来の地域をこえて新たなネットワークを形成しつつあることも明らかになった。

森田は 2010 年 9 月から翌年 1 月にかけて、おもに大阪府と北海道にある高等学校（私立および効率）で聞き取り調査をおこない、学校活動や学校運営のなかで地域社会（近隣の地域住民）が果たす役割を分析した。その結果、たとえば北海道の事例では、「不登校」などの多様な「経験」や生活上の「背景」をもつ生徒が数多く通う学校現場において、生徒間や教師-生徒間の人間関係が形成される際に、地域住民がその起点として重要な役割を果たしていることが明らかになった。

このように本研究ユニットは、昨年度までの東紀州地域での聞き取り調査の成果を踏まえながら、既存の地域の枠組みにとらわれない「社会的ネットワーク」とでもいうべき存在（親密圏と公共圏の中間領域）について議論を発展させようと試みた。以上のような本

報告書の狙いや意図が首尾よく成功をおさめているかどうかは、読者の皆様のご判断に委ねたい。

［謝辞］

本研究は、京都大学グローバル COE プログラム「親密圏と公共圏の再編成をめざすアジア拠点」における研究助成（次世代ユニット）の成果である。また、お忙しいなか、調査に協力していただいた横須賀市ハイランド、ならびに高等学校 A（大阪府）と高等学校 B（北海道）の皆様に心よりお礼申し上げます。

2010 年度次世代研究「地域社会における親密圏の再編と再創造に関する社会学的理論研究」（研究代表：江南健志）による成果である。

【メンバー】（ ）内は 2010 年度プロジェクト時点

江南 健志 （京都大学大学院文学研究科グローバルCOE研究員）
森田 次朗 （京都大学大学院文学研究科博士後期課程）
朝田 佳尚 （京都大学文学部非常勤講師）